

左から、井上兼一先生、  
西山正三先生、高山翼先生、  
中村彩斗先生

### 学校概要

**設立** 1974 (昭和 49) 年  
**形態** 定時制 (昼間・夜間)、通信制 / 普通科 / 共学  
**生徒数 (定時制夜間)** 1 学年約 20 人  
**2025 年度卒業生進路実績 (定時制夜間)** 4 年制大は、宮崎国際大、宮崎産業経営大に 2 人が合格。短大・専門学校進学 2 人。就職 5 人。

## CASE 3

### 西山先生の実践に見る / 人が動く学校の リーダーのあり方

- ✓ リーダーが「何を目標しているのか」「何を大切にしてほしいのか」を明確に語る
- ✓ やり直すことを非難せず、どんな意見も否定しない態度を示す
- ✓ いつ、何をするのかを、早い段階で文書で共有する
- ✓ 皆に得意・苦手があることを受け入れ、誰にも無理強いをしない

にしやま・まさみ◎同校に赴任して 7 年目。理科。同校の「総合的な探究の時間」を企画・運営するプロジェクトのリーダー。前任校の宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校から 20 年以上、探究学習に携わっている。

※プロフィールは、2026 年 3 月時点のものです。

宮崎県立宮崎東高校定時制課程夜間部  
 総合探究プロジェクトリーダー **西山正三**  
 課題や困難を抱える生徒が探究学習を通じて自己肯定感を高めている宮崎県立宮崎東高校定時制課程夜間部。一人ひとりの生徒を尊重する伴走のあり方を、教師たちはどのように自分のものとしていったのか。同校の探究学習を牽引する西山正三先生の同僚への働きかけから考える。

大切なことを明言するから、  
メンバーはブレなく  
生徒に向き合える



「人が動く学校」をエピソードから読み解く

教育活動の最も大切な点を共有し、  
生徒・同僚の個性を尊重してくれた



中村 彩斗

なかむら・あやと◎同校に赴任して1年目。  
1年次総合探究プロジェクトメンバー。生徒指導部。英語科。

宮崎県立宮崎東高校定時制課程夜間部には、小・中学校で不登校を経験したり、義務教育段階の基礎学力が十分に身につけていなかったり、他者と協働することに苦手意識があったりする生徒が一定数在籍している。そうした生徒にとって、同校の「総合的な探究の時間」は、自分の興味・関心を探りながら自己肯定感を高め、人生を切り拓く力を身につける大切な時間となっている。だからこそ同校の探究学習では、教師、そして外部の多様な人々が生徒一人ひとりに寄り添い、学びを支えている（写真）。

彩斗先生は、同校に赴任した直後、チームリーダーの西山正三先生から「生徒の興味・関心を引き出すために、たくさん生徒の話を聞いてあげてください」と、探究学習において大切な教師のかかわり方について説明されたと振り返る。

「実際、自分は何に興味・関心があるのかが分からず、課題の設定で悩む生徒は少なくありませんでした。西山先生は探究学習の伴走をする教師に、『どんなテーマで課題を設定してもよいです』『生徒との対話に時間をかけてください』と、生徒に伴走する教師のあり方を繰り返し説明しました。私たち教師はマインドマップやマンダ

「どんなテーマで課題を設定してもOK」。その言葉が生徒と私の背中を押しした



高山 翼

たかやま・つばさ◎同校に赴任して1年目。教務部副主任。数学科。

やるべきことが早めに示されるので、自分なりの工夫も提案できる



写真 「総合的な探究の時間」では同校の教師を始め、外部のキャリア教育コーディネーターや大学教授、さらに教職を志す宮崎大学の学生など、様々な人々が生徒に伴走している。

ラートを使いながら生徒と対話し、日頃生徒が大切にしている時間や楽しく取り組んでいることなどを生徒の言葉で引き出すことができるよう、意識しています（\*1）

時間をかけて対話をする中で、生徒は少しずつ自分の興味・関心に気づいていった。ただ、中には「興味はあるけれど、高校生の自分にはレベルが高

すぎるのではないかと、自分が設定した課題で探究学習を進めることを躊躇する生徒もいた。そうした生徒へのかかわり方について中村先生が西山先生に相談したところ、「途中でつまずき、課題を変えることになっても、それまでの過程で学べることはたくさんある。ハードルが高い課題であっても、生徒が興味があるのなら応援してあげてください」と助言された。「発表までたどり着けなくても大丈夫です」と言い切った西山先生の言葉に、中村先生は背中を押された思いがした。

「課題を変えることになっても、探究学習の価値は損なわれなれないと西山先生が明言してくれたおかげで、私も迷いが吹っ切れ、難しい課題を設定した生徒に親身に伴走しようという決意しました。探究学習のサイクルをうまく回せるかどうかよりも、生徒が探究学習を通じて最後まで自分の興味・関心に向き合えることを念頭に、『何かヒントがもらえないか、企業に相談してみ

\*1 同校の探究学習の取り組みは、本誌2023年度4月号「マイ・ストーリーを語る生徒を育む進路指導」で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」(https://view-next.benesse.jp/view\_section/bkn-hs/article15062/)、または右記の2次元コードからアクセスしてください。



## 「過程重視探究発表会」

### 過程重視探究発表会・交流会

(定時制の総合的な探究の時間全国大会・交流会)

3月

決して恵まれた環境と言えない定時制課程における探究活動において、結果ではなく、どのくらい自分の好きなものに対する探究活動に取り組めたかを重視する発表会を行い、生徒に成功体験を経験させ、これからの人生において自信を持たせる。

今回の発表会を通じて「過程重視の探究」モデルを提起する。

※高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編

第1章第2節 評価基準の設定と評価方法の工夫改善

「生徒がどのように探究の過程を通して学んだかを見ることが大事である。」

探究学習では、成果以上にプロセスを重視したいと考えた西山先生が、2024年度に全国の定時制高校にも参加を呼びかけて開催した。

※学校資料をそのまま掲載。

る？」などと、言葉をかけることができようになりました」（中村先生）  
高山翼先生は、探究学習に関する校内研修会で西山先生が「英語や数学と同じように、探究学習においても生徒によって得意・苦手があっても生徒が明言したことが忘れられないという。

「西山先生は本校主催の『過程重視探究発表会』などの事例を挙げながら（図）、『生徒が自分なりの成長を感じられたのなら、その探究学習は成功です』と私たちに説明しました。探究学習は成果以上にプロセスが大事であると西山先生は確信し、その考えを発表会を通して全国に広めようとしてい



リーダーが格好をつけない。  
だから私たちも本音を語れる

井上兼一

いのうえ・けんいち◎同校に赴任して1年目。  
ICT教育推進リーダー。3年次総合探究プロジェクトメンバー。商業科

ることが分かり、私も生徒の気づきや行動を待てるようになりました」  
西山先生が自校の探究学習のあり方を明確な言葉で伝えることで、一人ひとりの教師が自信を持って生徒に向き合うことができているのだ。

生徒にも教師にも、  
常に肯定的な態度で接する

探究学習を進めていく過程は決して順風満帆ではなく、伴走する教師も生徒とともに何度も悩み、試行錯誤する。井上兼一先生が伴走した生徒は、鉄道模型を活用した町おこしをテーマに課題を設定しようと考えた。鉄道模型はその生徒の興味・関心に合致するテーマであることは確かだが、趣味の延長のようなテーマではないか。高校の探究学習のテーマとしてふさわしいのかどうか迷いもあった井上先生に、西山先生は明快に答えた。「全く問題ないです。どんどんやってください」。

「生徒が取り組みたいと前向きになつたテーマなのだから、これだよいいではないか」という私の思いに、西山先生は全面的に賛同してくれました。自分が設定したテーマを認めてもらえたことで、その生徒はさらにやる気を出して課題を掘り下げ、『鉄道模型を使った町おこしにSTEAM教育の要素を加えてみたい』と私に提案してきました。STEAM教育に独力でたどり着いた生徒に、私は感動しました。

それ以降、生徒と私は互いの空き時間を見つけて一緒に探究学習に取り組んでいます」（井上先生）  
2年次総合探究プロジェクトメンバーの佐和田彩先生は、1つのことに集中しなければいけない場面ではかこの意識が向いてしまい、課題の設定がうまく進まない生徒への対応について西山先生に相談した。

「私の話を聞いた西山先生は、すぐにその生徒に話しかけ、生徒と一緒にテーマを絞り込んでくれました。西山先生は生徒とどんなやり取りをしたのか、詳しく私に教えてくれるとともに、『佐和田先生がたくさん生徒と話をしてくれた後だったから、うまくまとまりました』と、それまでの私の生徒へのかかわりを肯定してくれました。生徒への接し方は間違っていないが、ただと安心できましたし、自分も西山先生のように、ほかの先生に協力したいと思えました」

同校の教師は、自分たちが安心して探究学習の企画・運営、そして生徒の伴走に取り組めるように西山先生が配慮してくれていると感じている。

「西山先生は探究学習の1年間の計画を年度初めに提示し、各活動の概要も実施の2か月前には伝えてくれるので、私たちも余裕を持って準備ができます。25年度の探究学習の発表会の概要も早い段階で分かっていたので、ICTを活用して講評結果をスピーディーに集約するといった工夫を私から提案することもできました」（高山先生）  
「西山先生は各活動の目標や進行計画などを必ず文書にしてくれます。いつ、何をすればよいのかが明確になっているので、自分なりの見通しが持て、安心して取り組むことができている」（中村先生）

西山先生が適材適所の役割分担をし

てくれていることも安心感を生み出し  
ていると佐和田先生は語る。

「西山先生は私たちの得意・苦手を  
踏まえてそれぞれの役割を考え、必ず  
『この仕事をやってもええですか』と  
意向を聞いてくれます。私たちのこと  
をよく見てくれていると感じます」

「発表が苦手な生徒に無理に発表さ  
せる必要はないですし、1人の方が集  
中できる生徒には空き教室を使わせて  
ください」と西山先生は同僚に話す。  
生徒にも同僚にも無理強いをしない。

井上先生は「西山先生は、取り組み  
の中の完璧ではない部分を決して隠さ  
ない」と指摘する。

「本校の探究学習も生徒によって取  
り組みの温度差があるなど、課題は存  
在します。西山先生はプロジェクトチ  
ーム内の話し合いの中でもそのことに  
きちんと向き合い、どうすればもっと  
よくなるかを考え、毎年改善策を模索  
し続けています。リーダーが格好をつ  
けることなく、まだまだできていない  
ことがあることを認めているからこ  
そ、私たちも不安や疑問を率直に口に  
することができているのだと思います」

否定されず、無理強いもされない。  
だから生徒は伸び伸びと学び、教師は  
生き生きと働くことができている。

## 「人が動く学校」を西山先生が考える

### 生徒に向き合う上で大切なことを共有する

本校にはそれぞれに事情や課題を抱え、苦勞をしてきた生徒が少なからずいます。だから本校の教師は皆、目の前の生徒を否定せず、受け止めます。探究学習で設定する課題も、生徒が生きてきたそれまでの人生とつながっていますから、本人の興味・関心を軸に自由に設定してもらえればよいと思っています。また、皆と同じ教室では集中できない生徒には、1人になれる場所を用意すればよいですし、人前で話すことがどうしても苦痛なら、発表会の日に欠席しても構わないと考えています。そうした本校の生徒の実態を踏まえた探究学習のあり方を、私は本校の先生方に丁寧に話すようにしています。

万が一誰かから「そんな探究学習では駄目だろう」とメンバーの先生方が怒られたら、リーダーの私が「それは私の責任です」と受け止めるべきだと思っています。でも実際には怒られたことはこれまで一度もありません。本校の生徒のことや本校の探究学習が目指すものを全教師が理解してくれているからだと思います。

生徒に対してそうであるように、私たち教師も互いの考えを否定しません。それぞれの得意なことを踏まえて役割分担をしています。皆に安心して仕事をしてもらえればと思っていますし、実際にやってみて自分に合わないと感じたら、交替してもらえばよいのです。各活動の概要を早めに周知するのも、安心して仕事をしてもらいたいからです。現場で「こうしてください」と指示するだけでは、言われた方はよく分からないですし、よく分からない状況は人を動けなくします。情報を早めに共有すれば、優秀な同僚たちはどんどん動いてくれます。

「総合的な探究の時間」は教科の枠を超えて全教師で取り組むことが求められていますが、探究学習の支援が得意な教師、苦手な教師がいて当然だと私は思っています。そのことを全員が理解するだけで、「自分にできる

ことをやればよいのだ」と、皆の心に余裕が生まれます。心に余裕があるから、課題の設定に苦勞する生徒、伴走に悪戦苦闘する同僚を穏やかな気持ちで見守り、それぞれが手を差し伸べ合うことができるのです。そして、リーダーの私が、探究学習のサイクルがスムーズに回らなくても生徒の中には探究学習を通じた変化や成長が生まれることを伝えたとともに、そうした支援のあり方を自分の行動でも示せば、先生たちはさらに心に余裕を持って生徒に向き合うことができます。成果が簡単に測れない探究学習に積極的にかかわってほしいという意思が教師に生まれるのです。

プロセスを重視する本校の探究学習観は私の勝手な思い込みではなく、学習指導要領に則ったものであることを、同僚には丁寧に説明しています。学習指導要領解説（総合的な探究の時間編）は何回も読み、本校の探究学習の理論的背景にしています。そうしてできた礎を私が自分の言葉で語ることで、先生たちは納得し、胸を張って生徒の伴走を続けられるのです。目の前の生徒にとって何が大事なのかが分かれば、私たち教師は自信を持って生徒と向き合うことができます。

